

神原 勇介 提出 学位申請論文

『源氏物語』明石一族物語の研究』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、『源氏物語』の明石一族物語を通して、ストーリー展開の力学を分析した物語形成論である。一般に、物語の形成時に加わる構想上のエネルギーのことをヴェクトル、指向(志向)、バイアスなどと呼ぶが、神原勇介氏はこれを「力源」と称して、その性質を明らかにしている。そもそも物語は、ストーリー展開を支える骨格と、テーマを担う場面とが織りなすものだが、明石一族物語が『源氏物語』のストーリー展開に深く関わる存在であることは疑いをさしはさむ余地がなく、ここに焦点を絞って『源氏物語』の力源を明らかにしようとしたものである。

全九章を、「第一篇 恋愛譚展開の力学」「第二篇 「越境」の力学」「第三篇

人生儀礼の力学」「第四篇 「女系繁栄譚」の力学」の四篇に分けて構成している。

第一篇では、明石巻における光源氏と明石の君の恋愛譚展開の力学について論じる。明石一族物語の展開の原動力は従来、入道が感得した「月日の瑞夢」や、「住吉神の加護」であると説かれ、平安朝の信仰に裏打ちされた一種の靈験譚と評されることが多かった。本論文では、そうした冥々の力の機能を認めつつも、作中人物たちの情念が紆余曲折を繰り返しながら具体的なストーリー展開に絡む表現構造を指摘した。

第二篇では、明石一族物語が、その主な舞台を畿外の明石から平安京西郊の大堰の地、そして光源氏世界の中枢である六条院へと移していくことを可能にした力学について論じる。播磨の受領たる明石一族が光源氏の栄達の物語に合流していくために地方から都へと軸足を移す「越境」を可能にした回路を分析する。

第三篇では、平安貴族社会における人生儀礼の位相に着目し、儀式儀礼の持

つ人間関係構築の機能を物語が取り込み、ストーリー展開を牽引する力学について論じる。具体的には、実母のもとを離れて紫の上に養育されることになる明石の姫君を取り巻く人間関係の構築と、その挫折のストーリー展開に、人生儀礼が効果的に利用されていることを指摘する。そのことを明らかにするため、『源氏物語』の同時代作品である『紫式部日記』に描かれた儀式儀礼を考証し、また、儀礼の会場としてよく用いられる「放出」なる貴族邸宅内の空間認識を分析したうえで、『源氏物語』の明石の姫君の成人の儀である「裳着」の意義について論じる。

第四篇では、明石一族物語全体を「女系繁栄譚」の観点から解釈し直す。そのため、明石一族物語を主として担う入道・明石の君父娘それぞれの人物造型を切り口に、物語を展開させる力学を分析する。また、入道が感得した「月日の瑞夢」が開示される場面の考察を通じて、「女系繁栄譚」としての明石一族物語の核心に迫る。

明石一族物語は、畿外の地に沈淪する一族と超越的な貴公子である光源氏と

の結縁を語る性質上、ストーリーを進行させること自体に多大な苦心を要した。端的に言えば、現実性と虚構性のせめぎ合いを乗り越えて、統一的な構造体たる物語をどのように形づくるのかという命題に挑んだものとして、『源氏物語』を捉えることができると、神原氏は主張する。物語展開の重要局面では、状況の膠着と紆余曲折がもたらすストーリーの停滞が絶えず繰り返されるが、その背景には、明石一族と光源氏の身分の懸隔、明石の地と都社会の隔絶、関わりを持ってくる様々な人物たちの思惑や情念の交錯など、ストーリー展開の文脈に応じて次々と生起してくる現実的な問題があった。明石一族物語は、それらの複線的な指向のせめぎ合いを受け止めて物語展開形成の力源に転換した。作中人物たちに、直面する状況に対して知恵を絞らせ、時に引歌や手紙、人生儀礼など、風俗や文化の持つ力に活路を見出すことで行動を起こさせ、解決させている。

また、作品は明石の君の身分の低さを厳然たる事実として表示しつつ、それに併呑されない独自の位置づけを保持し続けた。このことは、もちろん現実社

会では実現が困難な、虚構の物語世界に固有のことだったからに違いない。だからと言って、それを成し遂げるために、陳腐な「そらごと」や都合のいい偶然を作品は介在させたりはしない。それゆえに、この物語は作り話でありながら現実にも起こりうる出来事と認められるほどのリアリティを獲得し、きわめて強度の高い虚構として成立しえたものと、神原氏は指摘する。

このようにして明石一族物語が語り抜いたのは、男系原理による「家門」の論理に囚われることなく、「女系血族の繁栄」に活路を見出し、自足を得ていく話であった。明石一族物語は、平安貴族社会における落伍者が、虚構作品にのみ許される独自の道筋を辿り、固有の価値観を創出することで自身の尊厳を回復するに至る物語である、と神原氏は指摘する。その過程においては、現実に劣らぬ真実性もが執拗に担保されていた。それによって淪落の人の自己実現欲求を充足させるものとして読まれる物語たりえたのだろうと神原氏は想定する。

明石一族の物語は、『源氏物語』内部において、他の構想との軋轢を生じる。男系原理の頂点たる「皇統」をめぐる光源氏栄達の構想、あるいは妻妾集団のヒ

エラルキーにおいて頂点に据わるべき紫の上物語の構想を、明石一族物語の構想が相対化したのだと、神原氏はみる。虚構性と現実性、そのもっとも危ういせめぎ合いの最前線に位置するのが明石一族物語であり、それゆえに『源氏物語』の中軸を担いうるモチーフとして明石一族物語が存立していると神原氏は結論づけている。

論文審査の結果の要旨

『源氏物語』の先行研究において、明石一族物語が『源氏物語』のストーリー展開に深く関わる存在であることは指摘されてきた。本論文を総括的に評価すると、そのような構想の問題と、人物造型や微細な表現との相関性を明らかにした点において、先行研究を大きく乗り越えたものと評価しうる。以下、その具体例を列挙する。

第一篇第一章では、明石入道の人物造型に、「あて」なる貴種的要素と、そこ

から逸脱する「ひがもの」の要素を同居させ、これを明石一族の淪落と復活の構想に連動させたと神原氏は指摘する。明石一族物語の起死回生的な復活の構想に「あて」も「ひが」も必要であったというわけで、物語構想と人物造型の相関性を論じたものである。

第一篇第二章では、父明石入道が娘明石君の恋文を代作する異常性に着目し、父の主体性が物語のストーリー展開に機能するとともに、父の前景化・主体化によって娘の後景化・没主体化が果たされるという人物造型上の相関性を指摘する。これは、明石君が自身の身分の低さにコンプレックスを抱いて姫君とともに二条東院や六条院に移ろうとしない先々の展開に通じるものであり、その構想のねじれが大堰以前から芽生えていたとする重要な指摘である。

第一篇第三章では、入道が光源氏に投げかけた季外れの引歌の意義を問題にした。この引歌が滑稽なのか秀逸なのか研究史上で評価が分かるところであったが、この歌が次の場面へと展開する契機となっている事実に着目し、入道の古典的教養を示す機能を有するものだと神原氏は指摘する。従来の議論を軌道

修正しえたのは、神原氏のストーリー展開論の巨視が生きた部分だと評価することができる。

第二篇第一章は、明石巻の終末部に見られる入道の遣水転落記事を読み解いたもので、神原氏はこれを、明石巻全体が負った機能の観点から解き明かす。すなわち、明石巻が明石君の上洛・非上洛の岐路に立つ巻であることを踏まえ、たうえで、明石入道を徹底して偏屈、滑稽に描くことでそれまでの前景化・主体化を停止させ、畿外から都社会への「越境」を果すための前提を整えたものとした。これも、物語構想と人物造型の相関性を論じた好論である。

第二篇第二章は、明石君の母親の呼称が松風巻で唐突に「母君」から「尼君」へと変化したことを問題にした。大堰転居のタイミングと出家が一致することは、「ひがもの」の夫と地方で過ごした日々の風評を清算し、娘に山荘の女主人の座を譲らせる設定を企図したものであり、明石の君の地位向上を狙ったものと結論づける。これも、物語構想と人物呼称の相関性を指摘した、手堅くも大きな論である。

第四篇第一章では、入道に一貫して付与される「ひがもの」の属性に再び着目する。この非常識ないしは奇矯に見られがちな性質が、その実、瑞夢の実現へ着実に近づけるために必要な資質を付与するものであったと結論づける。

第四篇第三章では、入道の父大臣の「ものの違ひ目」の噂を光源氏が語る場面に注目する。「違ひ目」によって没落の憂き目を見た末に女系子孫の活躍によって復権した数多の史実を背後に踏まえつつ、入道が感得した瑞夢の神聖な力によって、史実とは次元を異にする物語独自の成功譚を形象したものと指摘する。これも、本論文中の秀逸な点として評価しうる章である。

本論文の全体を通して、神原氏は、明石一族物語のストーリー展開を形成していく力源が、作中人物たちの情念、思惑、その発露たる言動など、物語世界に生きる人間の活動として表現されていることを明らかにした。『源氏物語』の先行研究においては、物語の長大さゆえか、構想論、人物論、典拠論、表現論、語り論などと細分化される傾向が強く、これらを一元的に論じる神原氏の研究姿勢は、とくに高く評価されるべきものである。

ただし、結論を急ぐあまり文脈の解釈に恣意性の混じるところがあったり、歴史的事体の解明に深入りしすぎて作品分析から逸れるところがあったりする問題点がある。また、『源氏物語』の動態の様相への顧慮の浅いところがみられたり、第三部世界までの見通しに欠けたりする点も、課題として残る。さらに、研究開始当初のテキスト論的な手法から、近年の形成論への移行の痕跡がみられ、本論文の全体を見渡した時にわずかながら不統一感の残るところがある。しかし、これらは論全体の到達点の高さからすれば瑕疵に過ぎない。閉塞状況にあるとも言われる『源氏物語』研究において、本論文が果たす役割は大きく、右のような課題を克服したうえで早期の公刊が望まれる研究成果である。

以上のように、研究の独自性、水準の高さ、学界への貢献度のいずれの観点からみても、博士学位を授与されるにふさわしい研究であると認められる。

令和二年十二月十四日

主 査	國學院大學教授	野 中 哲 照	印
副 査	國學院大學教授	山 田 利 博	印
副 査	フェリス女学院大学教授	竹 内 正 彦	印

神原 勇介 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

令和二年十二月十四日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	野中哲照	印
副査	國學院大學教授	山田利博	印
副査	フェリス女学院大学教授	竹内正彦	印